

第2部 スーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組み

I. 第2年次の取り組みの概要

doi: 10.18999/bulsea.62.49

第1章

研究開発の理念と概要

三小田 博 昭

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	なごやだいがくきょういくがくぶふぞくちゅう・こうとうがっこう							②所在都道府県	愛知県
27～31	①学校名	名古屋大学教育学部附属中・高等学校								
③対象 学科名	④対象とする生徒数（2015.2.3現在）							⑤学校全体の規模		
	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年	計	併設型中高一貫高（中学各学年2クラス、高校各学年3クラス）中学240名、高校358名、合計598名		
普通科(男)	40	40	40	59	54	56	289			
(女)	40	40	40	64	64	61	309			
⑥研究開発 構想名	トップ型SGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築									
⑦研究開発 の概要	本構想は、本校の規定するグローバル・リーダーである「自立した学習者」の育成を目標とし、以下三つの研究開発を行う。Ⅰ）必修「総合人間科」の仮説検証型探究カリキュラムへの再構築。Ⅱ）理解・思考型学習「協同的探究学習」による学習方法の開発。Ⅲ）国内外グローバル拠点を活用した論理的表現力を高める教育方法の開発。以上を名古屋大学と一体化して実施し、高大接続の「名古屋大学モデル」発信を目指す。									
⑧研究開発 の内容等	⑧ — 1 全体	（1）目的・目標 本構想の目的は、グローバル化が進んだ世界で活躍する「自立的な学習者」を育てることである。「自立した学習者」とは、ものごとの本質を地球規模で捉え、自分の力で探究し続ける勇気と判断力のある人間であり、本校の規定するグローバル・リーダー像である。この目的のため、本校はトップ型SGUである名古屋大学と一体化し、探究型カリキュラムの開発と構築を目指す。以下の三点を目標とする。 ・地球的課題に取り組むことで国際的視野を持ち、ものごとの本質を捉え、既存の問題と潜在的な問題の発見を行い、論理的・多元的に考える力を持ち、探究し続ける生徒の育成。 ・個別探究と集団による探究を通して、他者と協同して問題解決ができる国際的素養を身につけた生徒の育成。 ・自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現し、勇気と判断力のある生徒の育成。								
		（2）現状の分析と研究開発の仮説 本校でカリキュラム開発した「総合人間科」は、生徒の進路選択や大学での学びに繋がる事例も多く、成果をあげているが、一年単位の学習のため探究を今以上に深めにくい（Ⅰ）。本校はSSH指定を機に、理系科目を中心に「協同的探究学習」を取り入れた結果、理系生徒の思考力、表現力などが向上した。一方、文系生徒の伸びは高くない。この学習法を理系科目中心に展開したためと考えられる（Ⅱ）。本校はSGHアソシエイトとしての活動、ユネスコスクールとしてのESD実践の他、学校の国際化に尽力し、海外提携校との交流や交換留学生受け入れに積極的である。しかし現状では生徒交流で終始し、英語による探究活動に至っていない（Ⅲ）。以上の課題解決のため、三つの研究開発を行う。								
		Ⅰ）6年間必修科目「総合人間科」の仮説検証型探究カリキュラムへの再構築 一年単位の学習方式から6年一貫型のカリキュラムとし、PBLに基づく仮説探究型の学びにする。国際バカロレアのTOKを取り入れ、仮説検証に必要な批判的思考力を育て、探究型学習に役立てる。これらにより「自立した学習者」が育つ。								
		Ⅱ）理解・思考型学習「協同的探究学習」による学習方法の開発 SSHの成果を受け「協同的探究学習」を文系・実技系教科に拡大し、個別探究と集団での探究を行う。これにより国際的素養が獲得され、協同的な課題発見力・解決力が高まる。								
		Ⅲ）国内外グローバル拠点を活用した論理的表現力を高める教育方法の開発 国内拠点で他校生徒、留学生らと、海外拠点で現地校の生徒と、地球的課題の解決方法を考える協同プロジェクトを行う。これらを通し、英語での論理的表現力、課題解決力が高まる。								
		（3）成果の普及 SGH研究成果発表会を催し、成果を発信する。研究成果を紀要にまとめ、関係機関に配布し、成果の普及を図る。生徒の各種コンテスト・発表会への参加を奨励し、生徒を通じて成果を発信する。海外拠点での課題研究については現地で成果報告会を行う。幹事校が運営しているSGH専用ホームページも積極的に活用し、SGH校と情報を共有する。								

<p>⑧ 研究開発の内容等</p>	<p>⑧—2 課題研究</p> <p>(1) 課題研究内容 併設型中高一貫6年間の教育課程を通し、「自立した学習者」を育成することを目的に、Ⅰ) 必修科目「総合人間科(課題探究Ⅰ・課題探究Ⅱ)」、Ⅱ)「協同的探究学習」、Ⅲ) 国内外グローバル拠点の効果的活用法の開発、以上三つ研究開発単位で実施する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 「総合人間科」: 中学では「生き方を探る」「生命と環境」「国際理解と平和」をテーマに、幅広い興味関心を養い、専門家へのインタビューなどを通じ、個人・グループ単位で研究をする。段階的に仮説検証型課題を取り入れ、高校での研究の基礎を築く。高校では地球的課題に対応する六つの研究領域(生命、自然と環境、心、人権と共生、平和、文化)を設け、仮説検証型課題探究を行う。パフォーマンス評価や、ポートフォリオ評価を行い、地球的課題への理解や課題解決への考えを持てたかを検証する。 「協同的探究学習」: SSHで成果があった学習法を文系教科・実技系教科に広げる。この学習では、教師が設定した多様なアプローチが可能な課題に対し「思考プロセスを明らかにする個人探究場面Ⅰ」「多様な考えを比較検討する協同探究場面」「知識の関連づけから問題の本質をつかむ個別探究Ⅱ」の三段階を踏んで学習する。アンケートによる量的調査と記述問題による質的調査を行い、生徒の理解・思考が深まったかを検証する。 「国内外グローバル拠点」: 名古屋大学に国内グローバル拠点を置き、大学教員、留学生、他校生徒と地球的課題の解決方法を討論するGlobal Discussionを実施し、課題解決力向上をはかる。アジア拠点(新モンゴル高校)、北米拠点(East Chapel Hill High School)を活用し、現地高校生と協同して課題研究・発表を行う。生徒へのアンケート調査と生徒の発表内容から、論理的表現力が向上したか、課題解決力が高まったかを検証する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p>
	<p>⑧—3 上記以外</p> <p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 留学生TAを交えた少人数集団で世界的課題を討論する課外講座、Active Learning in Englishを実施する。テーマは毎回異なり、大学教員からテーマについて講義を受け、集団で解決策を討論し、発表と振り返りをする。全活動を英語で行う。毎回のレポートと討論内容をTAと検討し、英語による情報分析・発信力、課題解決力が高まったかを検証する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 トップ型SGU名古屋大学の資源を活用し、大学の英語力向上プログラムや初年次教育の講義へ本校生徒を参加させる。SGH生徒研究員制度により、国際的活動を行う生徒を増やす。コミュニケーション力向上プログラムとして、ESDコンソーシアムなど三プログラムを活用し、初対面の人と協同で課題解決を図る機会を作る。校内で流鏑馬や日本礼法教室などを開催し、日本で生活する生徒としてのアイデンティティを育成する。JICEなど公的機関との連携し、高校生・教員を本校に招き、協同課題解決などのプログラムを実施する。Global Education Centerを設置し、留学生徒を支援する。名古屋大学と連携し、高校、大学入学者選抜の一体的改革を行い、名古屋大学モデルを発信する。</p>
<p>⑨ その他特記事項</p>	<p>スーパーサイエンスハイスクール(2期、平成18年～平成27年度)、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」(平成25年～平成26)「SGHアソシエイト」(平成26年度)で培った研究成果を活用し、名古屋大学と一体となってグローバル人材の育成を目指す。JICE、AFS、YFUを通して、長期・短期留学生を毎年100名以上受け入れている。昨年は海外研究者・教員の訪問を50名以上受け入れた。</p>

第2章

研究開発の経緯

原 順 子

開発単位による凡例

- ①：開発単位Ⅰ ②：開発単位Ⅱ ③：開発単位Ⅲ
 ④：その他の研究開発

2016（平成28年）4月

- 4月4日(月) 第1回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
- 4月11日(月) 名古屋青年会議所主催 第1回FEEL JAPAN・FEEL NAGOYA TOUR（7月開催）の打ち合わせ JCI筒井泰之氏〔三小田博昭・原順子〕
- ①4月14日(木) 第1回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱガイダンス『研究テーマの作り方』
- 第1回高校2年生「総合人間科」課題探究Ⅱオリエンテーション
- 4月18日(月) 第2回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕金城学院高等学校へJK-JAPANワークショップ打ち合わせ〔三小田博昭・原順子〕
- ④4月19日(火) 名古屋大学理事 郷通子博士 ロッテ財団と留学支援の打ち合わせ〔三小田博昭・原順子〕
- ④4月20日(水) グローバル（以下G）コミッティモンゴル昨年度研修生徒の報告会と今年度へ引き継ぎ会
- ①4月21日(木) 第2回高校2年生「総合人間科」PBL 1 課題設定・分析・研究計画作成
- ②4月22日(金) 第1回協同的探究学習に関する助言・指導〔湯浅郁也・佐藤俊樹〕
- 藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- ③4月25日(月) グローバル（以下G）コミッティモンゴル生徒 新モンゴル高校とTV会議（8名参加）
- ④4月26日(火) Gコミッティノースカロライナ（以下NC）昨年度研修生徒の報告会と今年度へ引き継ぎ会
- ①4月28日(木) 第2回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『研究の方法1 調査方法』

第3回高校2年生「総合人間科」PBL 2エビデンスブック整備、参考文献Gコミッティモンゴル、名古屋大学博物館モンゴル展『恐竜時代のモンゴルの気候』見学〔三小田博昭・原 順子〕

③4月30日(土)

5月

- 5月2日(月) 第3回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
- 5月9日(月) 第4回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
- ④5月14日(土) UK-JAPAN宿泊地「美浜少年自然の家」下見打ち合わせ
- ③5月18日(水) 第2回Gコミッティモンゴル生徒、新モンゴル高校とTV会議（8名参加）
- ②5月20日(金) 第3回協同的探究学習に関する助言・指導〔今村敦司〕
- 藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- ③5月21日(土) 名古屋大学博物館モンゴル展『モンゴルの心ー馬頭琴』見学〔Gコミッティモンゴル生徒・三小田博昭・原順子〕
- 5月23日(月) 第5回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
- ④5月24日(火) 台湾台北市立中崙高級中学生徒 26名来校 高1英語の授業参加・交流〔亀井千恵子〕
- ①5月26日(木) 第3回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『研究の方法1 調査の方法』
- 第4回高校2年生「総合人間科」PBL 3情報検索の方法
- 5月30日(月) 第6回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕

6月

- ②6月3日(金) 第4回協同的探究学習に関する助言・指導〔加藤直志〕
- 藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- 6月6日(月) 第7回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕

- ① 6月9日(木) 第4回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『研究の方法2 調査結果の記録』
第5回高校2年生「総合人間科」PBL
4第1回問題解決 教員面談
- ② 6月10日(金) 第5回協同的探究学習に関する助言・指導 [今村敦司]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- ③ 6月11日(土) 新モンゴル高校教員
[Gantsetseg Badamdorj先生(体育科) / Uranteseg Ulambayar(算数)先生
研修のため滞在(～8月20日)]
- 6月17日(金)～18日(土)
第1回SGH連絡協議会@筑波大学文京校舎 [原順子・三小田博昭]
- ④ 6月18日(土) 公益社団法人名古屋青年会議所(以下JCI)主催『なるほど!ザ!明日からできる民間外交!』オリエンテーション 生徒20名参加
- 6月20日(月) 第8回SGH推進委員会 [三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- ⑤ 6月20日(月)～7月20日(水)
新モンゴル高校生を短期受け入れ(Zorigoo Binderya新モンゴル高校1年を6月に終了、高校2年A組で体験入学)
- ⑥ 6月21日(火) Gコミッティモンゴル モンゴル研修事前学習 名古屋大学 元博物館館長現特任教授 足立守先生「モンゴルの自然・文化・資源」
- ⑦ 6月23日(木) 第6回高校2年生「総合人間科」PBL
5第1回問題解決共有と第二次問題解決
- ⑧ 6月24日(金) 第6回協同的探究学習に関する助言・指導 [隅田久文]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- ⑨ 6月24日(金) UK-JAPANワークショップ打ち合わせ@名古屋大学教育推進課 野村俊夫先生
- ⑩ 6月25日(土) Gコミッティモンゴル モンゴル研修参加生徒 保護者説明会
GコミッティNC ホームステイ受け入れ家庭の保護者説明会
- 6月27日(月) 第9回SGH推進委員会 ルーブリック講師 日本フィギアスケートインストラクター川梅みほ先生 [三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司]

- 6月30日(木) Hong Kong Baptist University Affiliated School Wong 生徒95名 引率教員8名 通訳3名 訪問受け入れ 高校3年A・B組交流 PTAボランティアによる通訳・学校案内 [薫森英夫・原順子]

7月

- ⑪ 7月1日(金) 第7回協同的探究学習に関する助言・指導 [湯浅郁也]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- ⑫ 7月2日(土) アメリカノースカロライナ州(NC)から生徒10名 教員10名受け入れ
ホームステイ開始(～7月8日(金))
- ⑬ 7月3日(土) JCI主催「Feel Japan Feel Nagoya Tour」参加 [NC高校生と受け入れ生徒他計20名] @名古屋城など市内各所
- ⑭ 7月4日(月)～8日(金), 11日(月)～13日(水)
Gコミッティモンゴル 新モンゴル高校教員と名古屋大学モンゴル留学生によるモンゴル語講座 [生徒25名参加]
- 7月4日(月) 第10回SGH推進委員会 [三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- 7月5日(火) NC高校生 PTAによる名古屋伝統文化和装礼法体験(ゆかたの着付け)
- ⑮ 7月6日(水) JST主催 名古屋大学協力「さくらサイエンス交流」ブータン、中国、モルディブ、タイから高校生130名、引率者と通訳26名受け入れ。[三小田博昭・隅田久文・松本真一・渡辺絵美・佐藤健太・鈴木善晴・原順子・PATボランティア]
- ⑯ 7月6日(水) 第1回グローバルキャリアモデル・リレーシンポジウム 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構 益川敏英機構長 [さくら生徒と高校1年生計290名参加] モデレーター國枝秀世副総長 [西川陽子・佐光美穂]
- ⑰ 7月7日(木) 第7回高校2年生「総合人間科」PBL
6第二次問題解決の共有 レポート
- ⑱ 7月8日(金) 第8回協同的探究学習に関する助言・指導 [湯浅郁也]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
- 7月8日(金) AFSの学校訪問 米国、イタリア、デンマーク、ベルギー、モンゴル、香港から高校生13名受け入れ。[三小田博昭・亀井千恵子・佐藤健太]

- ⑧ 7月9日(土) 日本国際協力センター (以下JICE)
主催 カケハシ・プロジェクト 高校
生招へいプログラム ホームステイ受
け入れ家庭の保護者説明会
- ⑨ 7月11日(月) モンゴル国新モンゴル高校から生徒9
名 教員1名受け入れ
ホームステイ開始 (～7月20日)
- 7月13日(水) ベトナムコクヨ 名古屋大学招聘高校
生23名 本校訪問PTAによる日本文
化茶道・着付け体験
- ⑩ 7月14日(木) 新モンゴル高校の生徒 PTAによる
十二単着装講座
- 7月15日(金) JICE対日理解促進交流プログラム
(KAKEHASHI Project) 米国ロバー
ト・E・リー高校 生徒23名 教員2
名受け入れ。ホームステイ開始 (～20
日(金))
- 7月19日(火) 新モンゴル高校生 京都日本文化体験
- ⑪ 7月27日(水)～8月6日(土)
海外拠点 Gコミッティモンゴル モ
ンゴル研修 [本校生徒6名 引率 山
田孝・湯浅郁也・佐藤喜世恵]
- 7月27日(水) 第11回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- ⑫ 7月31日(日)～8月6日(土)
UK-JAPAN Science Workshops in
Nagoya 2016開催@名古屋大学各所、
美浜、名古屋市内各所 [UK County
Upper School, Bury St Edmunds、
Hills Road 6th Form College,
Cambridge、Seven Kings High
School, Ilford、St Mary Redcliffe
& Temple School, Bristol、Newham
Collegiate, East Ham, London、
Colston's Girls' School, Bristol、Rikkyo
School in England 合計16名
日本 浦和第一女子高等学校、金城学
院高等学校、東京学芸大学附属国際中
等教育学校、本校各4名 総計高校生
32名 引率者14名]

8月

- ⑬ 8月10日(水) 評価の尺度作りに関する打ち合わせ①
脇田貴文 関西大学社会学部准教授・
橘春菜 名古屋大学教育基盤連携本部
アドミッション部門特任准教授
- 8月19日(金) 第12回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- 8月21日(日)～27日(土)

イオン1%クラブ主催 2016年アジ
ア・ユース・リーダーズ参加 [生徒6
名 引率 亀井千恵子] @タイ王国

⑭ 8月22日(月)～23日(火)

国内拠点 グローバルディスカッション
開催 [東京学芸大学附属国際中等教育
学校3名、海陽中等教育学校5名、大
阪教育大学附属高等学校平野校舎5
名、神戸大学附属中等教育学校5名、
本校5名] [名古屋大学留学生TA11名]

9月

- 9月2日(金) 名古屋大学松尾清一総長 本校視察 授
業観察・SGH取り組みの報告
- ⑮ 9月2日(金) 第10回協同的探究学習に関する助言・
指導 [湯浅郁也]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究
科教授
- 9月5日(月) 第13回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- ⑯ 9月8日(木) 第8回高校2年生「総合人間科」夏休
みの課題報告会
- ⑰ 9月9日(金) 第11回協同的探究学習 評価に関する
助言・指導 [今村敦司・石川久美・大
羽徹・三小田博昭]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究
科教授
- 9月26日(月) 第14回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- 9月28日(水) 米国ノースカロライナ州 NUテック
岩倉さん来校 打ち合わせ
- ⑱ 6月29日(木) 第5回高校1年生「総合人間科」課題
探究Ⅱ『夏休みのレポート発表会』
- ⑲ 9月30日(水) 評価の尺度作りに関する打ち合わせ②
脇田貴文 関西大学社会学部准教授・
橘春菜 名古屋大学教育基盤連携本部
アドミッション部門特任准教授

10月

- 10月3日(月) 第15回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]
- 10月4日(火) University of Leicester Professor Paul
Boyle, President & Vice-Chancellor 名
古屋大学表敬訪問に同席 UK-JAPAN
の依頼 [松尾清一総長・國枝秀世理事
副総長・渡辺芳人理事副総長・東村博
子副理事・岡田亜弥副理事・三小田博
昭・原順子]
- ⑳ 10月12日(水) 第1回Gコミッティモンゴル生徒、新

	モンゴル高校とTV会議（8名参加）	11月7日（月）	第17回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
①10月13日（木）	第6回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL1課題分析』	11月8日（火）	教員・生徒アンケートの統計的処理・分析・助言 寺尾尚大氏 名古屋大学教育発達科学研究科博士課程 心理発達科学専攻
①10月20日（木）	第7回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL2課題分析と予備調査』	①11月10日（木）	第8回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL3課題分析と予備調査』
	第1回SGH運営指導委員会〔運営指導委員 辻村哲夫・砂山幸雄・玉井俊紀・山田和人・古澤礼太・堀雅寿・松田武雄他 本校SGH推進委員〕	②11月12日（土）	高大接続改革シンポジウム『高校・大学・企業がともに考える教育改革と入試改革:「高大社接続」の可能性を探る』@メルパルク〔原順子・三小田博昭〕
②10月22日（土）	ワールド・コラボ・フェスタ〔Feel Japan Feel Nagoya Tour 参加生徒10名による展示〕@名古屋 栄 オアシス21「銀の広場」	②11月13日（日）	第5・6回Active Learning in English (ALE) 開催〔三小田博昭・大矢美香・本校高校生36名・名大留学生TA11名〕
①10月27日（木）	第8回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL2課題分析と予備調査』	②11月15日（火）	評価の尺度作りに関する打ち合わせ④ 脇田貴文 関西大学社会学部准教授・橘春菜 名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門特任准教授
②10月28日（金）	第14回協同的探究学習 評価に関する助言・指導〔仲田恵子・曾我雄司〕	③11月16日（水）	第2回Gコミティモンゴル生徒、新モンゴル高校とTV会議（8名参加）
	藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授	①11月17日（木）	第9回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL4第一次問題解決』
②10月28日（金）	教員・生徒アンケートの統計的処理・分析・助言 寺尾尚大氏 名古屋大学教育発達科学研究科博士課程 心理発達科学専攻	①11月17日（木）	第9回高校2年生「総合人間科」二回目PBL1第一次問題解決 教員面談
②10月30日（日）	第1・2回Active Learning in English (ALE) 開催〔名古屋大学大学院教育発達科学研究科 高井次郎先生・三小田博昭・大矢美香・本校高校生25名・名大留学生TA11名〕	11月18日（金）	SGH実地調査〔文科省初等中等教育局 松尾篤志視学官・矢田裕美国際教育課計画指導係長小川由香国際教育課計画指導係松尾裕秀理事副総長・氏家達夫教育学部長・高田義雅文系総務課長・市岡浩之文系経理課長・松田武雄校長・三小田博昭・原順子・山田孝・佐藤俊樹・鶴田成二・神永幸子〕
10月31日（月）	第16回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕	②11月19日（土）	7・8回Active Learning in English (ALE) 開催〔三小田博昭・大矢美香・本校高校生16名・名大留学生TA11名〕
11月		11月19日（土）	第1回大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 課題研究評価研究会参加〔三小田博昭〕
11月2日（水）	仙台二華中学校・高等学校SGH公開研究会参加〔今村敦司・澤井祐哉〕	11月21日（月）	第18回SGH推進委員会〔三小田博昭・原順子・佐光美穂・曾我雄司〕
11月2日（水）	教員・生徒アンケートの統計的処理・分析・助言 寺尾尚大氏 名古屋大学教育発達科学研究科博士課程 心理発達科学専攻	①11月24日（木）	第10回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL5第一次問題解決と共有』
②11月4日（金）	第15回協同的探究学習 評価に関する助言・指導〔澤井祐哉〕		第10回高校2年生「総合人間科」二回目PBL2第二次問題解決
	藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授	②11月25日（金）	第18回協同的探究学習 評価に関する助言・指導〔今村敦司・佐光美穂〕
②11月4日（金）	評価の尺度作りに関する打ち合わせ③ 脇田貴文 関西大学社会学部准教授・橘春菜 名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門特任准教授		藤村宣之 東京大学大学院教育学研究科教授
②11月5日（日）	第3・4回Active Learning in English (ALE) 開催〔三小田博昭・大矢美香・本校高校生24名・名大留学生TA11名〕		

⑧11月25日(金) 評価の尺度作りに関する打ち合わせ⑤
脇田貴文 関西大学社会学部准教授・
橘春菜 名古屋大学教育基盤連携本部
アドミッション部門特任准教授

⑩11月26日(金)～30日(水)
米国NC州East Chapel High Schoolと
姉妹校協定締結式@East Chapel High
School [松田武雄・原順子・三小田博昭]

12月

12月2日(金) アドミッション・ポートフォリオ 配
布 記入日

⑧12月4日(日) 第9・10回Active Learning in English
(ALE) 開催 [三小田博昭、大矢美香、
本校高校生34名、名大留学生TA11名]

12月5日(月) 第19回SGH推進委員会 [三小田博昭・
原順子・佐光美穂・曾我雄司]

⑩12月6日(火) 第3回Gコミッティモンゴル生徒、新
モンゴル高校とTV会議 (8名参加)

⑩12月7日(水) 第1回Gコミッティ・ジュニア (中学
生)、モンゴル国立教育大学附属中学
校 とTV会議 (中学生26名参加)

12月12日(月)～16日(金)
AFSから短期留学生受け入れ [Mr.
Elan Aqil Bacchus (USA)]

⑩12月14日(水) 第2回Gコミッティ・ジュニア (中学
生)、モンゴル国立教育大学附属中学
校とTV会議 (中学生25名参加)

⑩12月16日(金) 第20回協同的探究学習 評価に関する
助言・指導 [渡部絵美]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究
科教授

12月27日(水) 第2回SGH連絡協議会参加@筑波大学
文京校舎 [三小田博昭]

12月28日(水) 米国NC州East Chapel High Schoolと協
同研究打ち合わせ [East Chapel High
School青柳好美先生他3名・三小田博
昭・原順子]

2017 (平成29年) 1月

①1月12日(木) 第11回高校1年生「総合人間科」課題
探究Ⅱ『PBL6 第二次問題解決』
第11回高校2年生「総合人間科」二回
目PBL2 ミニレポート②

⑩1月13日(金) 第21回協同的探究学習 評価に関する
助言・指導 [加藤直志]
藤村宣之 東京大学大学院教育学研究
科教授

1月16日(月) 第20回SGH推進委員会 [推進委員+石

川久美]

1月18日(水) 韓国・シンガポール訪問団学校訪問受
け入れ [韓国中学生20名・シンガポ
ール中学生80名・本校中学生80名・Gコ
ミッティジュニア44名]

1月19日(木) JST主催 名古屋大学協力「さくらサ
イエンス交流」中国、パキスタンから
高校生120名、引率者と通訳24名受け
入れ [三小田博昭・隅田久文・松本真一・
渡辺絵美・佐藤健太・鈴木善晴・原順
子・PATボランティア]

第2回グローバルキャリアモデル・リ
レーシンプジウム 名古屋大学大学院
工学研究科 天野浩教授 [さくら生徒
と高校1年生計240名参加]

①1月19日(木) 第12回高校2年生「総合人間科」ポス
ターセッション発表準備

⑩1月20日(金) 第22回協同的探究学習 評価に関する
助言・指導 [仲田恵子・佐光美穂・曾
我雄司] 藤村宣之 東京大学大学院教
育学研究科教授

1月21日(土) 第2回大阪教育大学附属高等学校天王
寺校舎 課題研究評価研究会参加 [三
小田博昭]

①1月26日(木) 第12回高校1年生「総合人間科」課題
探究Ⅱ『PBL7 結果共有と振り返り』

⑩1月27日(金) 第23回協同的探究学習 評価に関する
助言・指導 [岡村明・仲田恵子・佐光
美穂・湯浅郁也] 藤村宣之 東京大学
大学院教育学研究科教授

⑩1月27日(金) Gコミッティノースカロライナ (NC)
ノースカロライナ研修事前学習

1月30日(月) 第21回SGH推進委員会 [推進委員+石
川久美]

2月

①2月2日(木) 第13回高校1年生「総合人間科」課題
探究Ⅱ『PBL8 発表資料準備』
第13回高校2年生「総合人間科」グル
ープ内ポスターセッション

2月3日(日)～4日(日)
神戸大学附属中等教育学校SGH第2年
次報告会参加 [佐光美穂・湯浅郁也・
隅田久文]

2月5日(日) JICE対日理解促進交流プログラム
(KAKEHASHI Project) 事前学習会

2月6日(月) 第22回SGH推進委員会 [推進委員+
石川久美]

⑩2月7日(火) 第4回Gコミッティモンゴル生徒、新

モンゴル高校とTV会議（8名参加）

- ㊦ 2月8日(水) GコミッティNC ノースカロライナ研修事前学習

2月10日(金) SGH2年次研究成果発表会開催『『自立した学習者』を育てる協同的探究学習』

第14回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL9研究成果発表会』

第14回高校2年生「総合人間科」ポスターセッション

第2回SGH運営指導委員会

- ㊦ 2月11日(土) GコミッティNC ノースカロライナ研修 保護者説明会

2月13日(月) 第23回SGH推進委員会 [推進委員+石川久美]

- ㊦ 2月13日(月) Gコミッティモンゴル生徒、新モンゴル高校とTV会議（8名参加）

- ㊦ 2月15日(水) GコミッティNC ノースカロライナ研修事前学習

- ① 2月16日(木) 第15回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『PBL10個人レポートまとめ』
第15回高校2年生「総合人間科」ポスターセッションの振り返り

2月18日(土) JICE対日理解促進交流プログラム (KAKEHASHI Project) 保護者説明会

2月19日(日) 第1回都内国立校SSH/SGH課題研究3成果発表会参加 [原順子・渡辺武志]

3月

- ㊦ 3月3日(金) GコミッティNC ノースカロライナ研修事前学習

3月8日(水)～15日(水)

JICE主催 対日理解促進交流プログラム (KAKEHASHI Project)

テキサスサンアントニオ研修 [生徒23名 引率 原順子・三小田博昭]

- ① 3月9日(木) 第16回高校1年生「総合人間科」課題探究Ⅱ『来年度のテーマ決め』
第16回高校2年生「総合人間科」PBL二回のまとめ

- ㊦ 3月11日(土)～21日(月)

海外拠点 GコミッティNC ノースカロライナ研修 [生徒10名 引率 佐藤俊樹・渡辺絵美・現地通訳者]

(文責 原 順子)

第3章

成果と課題

三小田 博 昭

3-1 研究開発の成果

SGH研究開発1年次である平成27年度は、以下の取組を重点的に行った(Plan Do)。

- ①興味関心の育成「課題探究Ⅰ」と仮説検証型課題研究「課題探究Ⅱ」
- ②国際的素養を身につける「協同的探究学習」
- ③1年次の実践グローバル拠点の効果的な活用法「国内グローバル拠点」
- ④グローバル拠点の効果的な活用法「海外グローバル拠点」
- ⑤英語による思考力・表現力を育成するALEの実践
- ⑥検証評価に関する実践

その取組に関する成果と課題をSGH推進委員会が中心となり分析した内容を「平成27年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書」の中で以下のようにまとめた(Check)。

『27年度に作成した、生徒のパフォーマンスを評価するためのルーブリックを実際に活用することが次年度以降の課題である。また、同時に生徒の意識をはかるアンケートを年度初めに実施し、分析することも課題である。実際に活用する中で28年度中に調整を加えながらより精度の高いものにしていくことが必要であると考え。アンケートに関しては、教員の意識をはかるアンケートも実施したい。』

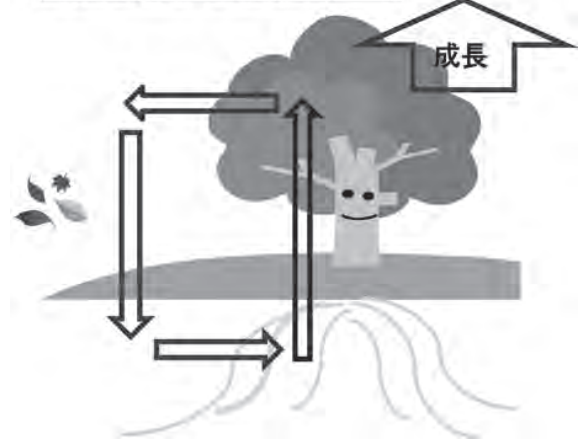
28年度は、上記の成果と課題の分析結果を受けSGH研究開発を実施した(Action)。

・SGHプログラム評価に関わる事項

- ①生徒の意識をはかるアンケート
データの収集(4月)
質問項目の精選(8月)
意識調査の実施(12月)
SGHプログラムとの相関分析(2月)
- ②生徒の思考力をはかる記述型課題の開発と試行(4月)
- ③教員アンケートの実施(10月)
- ④保護者アンケートの実施(12月)
- ⑤生徒学校調査の実施(12月)
- ⑥卒業生追跡調査の実施(試行中)

・SGH研究成果発表会開催による第3者評価

PDCA 循環型の成長イメージ



3-2 生徒の意識を測るアンケートからの分析

3-2-1 アンケート項目

SGHで育成する生徒像を本校では、『**ものごとの本質を捉え、国際的視野を持って探究し続ける、勇気と判断力のある「自立した学習者」を育てる**』と定義した。その上で、育成する生徒の力を以下のABCDの4つとした。アンケート項目に関しては、資料3に記載した。

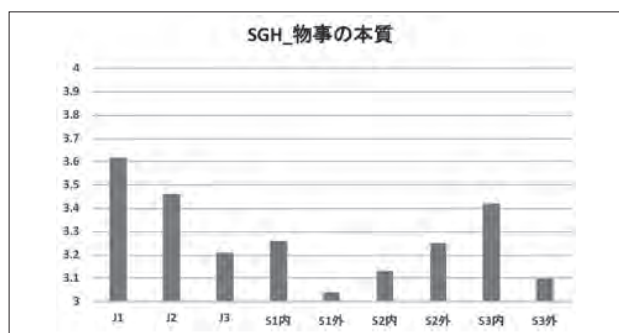
A: 本質理解 B: 国際的視野 C: 探究心 D: 判断力

選択肢

- | | | | |
|---|------------|---|-----------|
| 5 | とてもよくあてはまる | 4 | ある程度あてはまる |
| 3 | やや当てはまる | 2 | どちらともいえない |
| 1 | あてはまらない | | |

3-2-2 アンケート結果

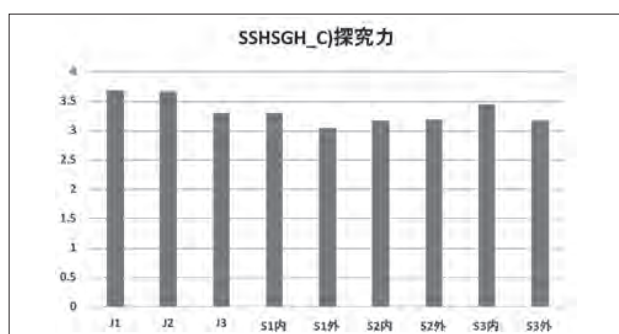
平成28年12月2日(金)に全校生徒(中学1年生～高校3年生)を対象に上記のアンケートを実施した。本校は併設型中高一貫校であるため、高等学校では40名の外進生が入学し、附属中学校からの内進生に混ざることが特徴である。そのため内進生と外進生を比較対象としてとらえることができる。Jは中学生を表し、Sは高校生を表す。また、内は内進生、外は外進生を表す。次のグラフはアンケートの結果である(5件法で5が上位)



(A: 本質理解)



(B: 国際的視野)



(C: 探究心)



(D: 判断力)

高校1年生に関して、A：本質理解 B：国際的視野 C：探究心において、内進生の方が、外進生よりも意識が高いことがわかる。これは、附属中学校の生徒もSGH対象生徒として附属高校生と一緒にプログラムに参加しているからであると推察できる。しかしながら高校2年生になると、内進生よりも外進生の方が意識が高くなる。外進生が本校のSGHを経験し意識が高くなるのだと考える。高校2年生の内進生の意識がグラフ上では、低いよ

うに見えるが、「2をどちらともいえない」にしているため、得点自体は高く意識が低いわけではない。今回のアンケート調査は単年度のものであるため、今後同じ生徒を対象とした経年変化を分析していく計画である。

3-2-2 研究開発課題Ⅲ（グローバル拠点を活用して、表現力や判断力を身につける方法の開発）と意識調査アンケート結果の分析

生徒の意識を測るアンケート結果と、研究開発単位Ⅲの分析を実施した。本校の研究開発単位Ⅲは、グローバル拠点を活用して、表現力や判断力を身につける方法の開発である。グローバル拠点は国内拠点としてのTGU名古屋大学と、海外拠点としてアジア拠点・北米拠点を持っている。国内拠点での活動は、TGU名古屋大学と協力して実施しているGlobal Discussionである。Global Discussionに参加した生徒と、参加していない生徒との相関を調べた結果が以下の（1）である。また、海外拠点としてアジア拠点での活動は、課題研究の内容とリンクして行うSGHモンゴル研修、そして北米拠点での活動は、同じく課題研究の内容とリンクして行うSGHノースカロライナ研修である。海外拠点での活動に参加した生徒と、参加していない生徒との相関を調べた結果が以下の（2）である。

	国内研修参加無			<	国内研修参加有			t	
	n	M	SD		n	M	SD		
A：本質理解	284	3.2	0.9	<	59	3.28	0.81	0.67	ns
B：国際的視野	288	3.27	0.99	<	59	3.65	0.82	3.12	**
C：探究心	284	3.22	0.82	<	59	3.32	0.82	0.84	ns
D：判断力	285	3.47	0.74	<	59	3.48	0.7	0.14	ns

t検定の結果、Bの力（国際的視野）に関しては、国内研修参加者（国内拠点での活動に参加した生徒）と参加しなかった生徒で、カイ2乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた。

	国内研修参加無			<	国内研修参加有			t	
	n	M	SD		n	M	SD		
A：本質理解	302	3.15	0.88	<	41	3.68	0.83	3.82	***
B：国際的視野	305	3.27	0.97	<	42	3.86	0.8	3.99	***
C：探究心	302	3.18	0.82	<	41	3.67	0.73	4.38	***
D：判断力	304	3.43	0.73	<	40	3.76	0.67	2.87	***

t検定の結果、Aの力（本質理解）、Bの力（国際的視野）、Cの力（探究心）、Dの力（判断力）のすべてにおいて、海外研修参加者（海外拠点での活動に参加した生徒）と参加しなかった生徒で、カイ2乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた。

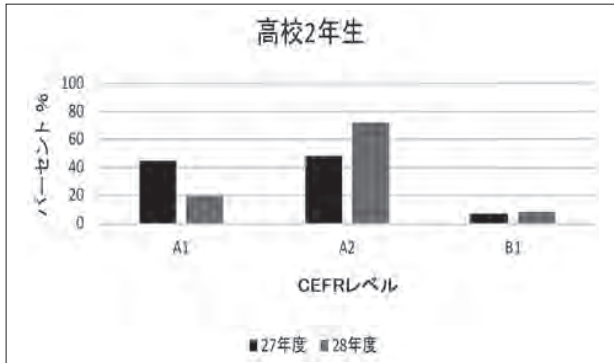
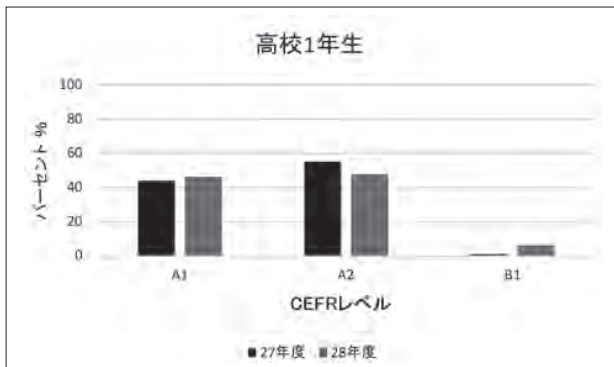
3-2-3 英語力と意識調査アンケート結果の分析

本校では、平成27年度から生徒の英語力を測るためにGTEC for students（Benesse）を実施している。対象学年と試験レベルは以下の通りである。実施は12月上旬で

ある。

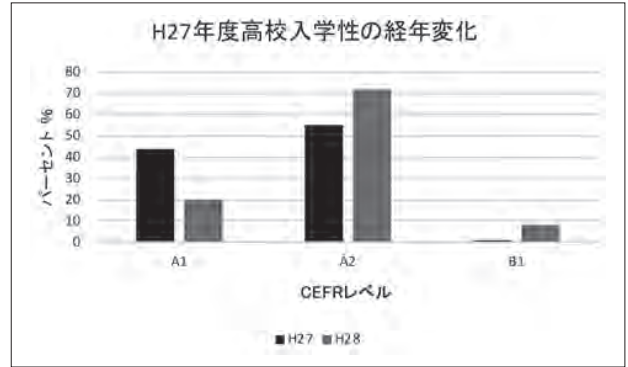
学 年	試験レベル
中学2年生 (80名)	CORE
中学3年生 (80名)	BASIC
高校1年生 (120名)	ADVANCE
高校2年生 (120名)	ADVANCE

また、下のグラフは平成27年度と平成28年度の高校1年生と高校2年生のCEFRレベルの変化を表したグラフである。高校1年生はB1レベルの生徒の割合が平成27年よりも増加した。また高校2年生では、B1レベルの生徒の割合はあまり変化はないが、A2レベルの生徒の割合が大きく増加したことがわかる。GTEC for students の指標はCEFRレベルでの表示ではないため、Benesseが作成した換算表を利用した。



次のグラフは、平成27年度に本校（高校）に入学した生徒（現高校2年生）のCEFRレベルの経年変化である。一目瞭然のように、A1レベルの生徒の割合が減り、A2レベル・B1レベルの生徒の割合が増加している。生徒の英語力が着実に上がっていることがグラフからも見て取れる。

高校3年生では、GTEC for students (Benesse) を実施しないため、平成27年度に本校（高校）に入学した生徒の3年間の変化は見ることはできないが、平成28年度に本校（高校）に入学した生徒の経年変化も改めて分析する計画である。



次に生徒（高校生）の英語力と意識調査アンケート結果を分析したのが下の表である。

	CEFR B1取得無			<	CEFR B1取得有			t	
	n	M	SD		n	M	SD		
A：本質理解	214	3.13	0.89	<	16	3.79	0.84	3.024	***
B：国際的視野	216	3.21	0.95	<	16	4.1	1.13	3.078	***
C：探究心	214	3.15	0.82	<	16	3.84	0.85	3.152	***
D：判断力	215	3.42	0.72	<	16	4.01	0.87	2.641	*

t検定の結果、Aの力（本質理解）、Bの力（国際的視野）、Cの力（探究心）、Dの力（判断力）のすべてにおいて、CEFR B1レベルの生徒とそれ以外の生徒で、カイ2乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた。

3-3 生徒の思考力を測る記述型課題からの分析

3-3-1 記述型課題

2000年のPISA調査の「ゼンメルワイス医師の産褥熱に関する問題」をもとに、本校独自で新たな課題を作成し高校1年生の生徒に実施した。また、本校同時に評価水準を作成し生徒の回答を分析した。問題は全部で5問あり、それぞれの問題はそれぞれ以下のものを測ることを目的としている。

問1 数学と理科を関連づけた思考

(1) 数学に関する深い理解 (2) 理科に関する深い理解 (3) 教科（理科・数学）を統合した深い理解

問2 理科と社会を関連づけた思考

(1) と (2) のセット問題 教科（理科・社会科）を統合した深い理解

課題及び評価水準は、資料3に記載した。この記述型課題は本校は行っているSSHで育成する力を測るためにも使用しているため、自然科学系教科の力も併せて測っている。また、教科を統合した力を測るため、問1のような、自然科学系教科を融合した力を測る課題と自然科学系教科と社会科学系教科を融合した力を測るものに大別している。この章では、SGHに特化し、自然科学系教科と社会科学系教科を融合した力を測るための「問2 理科と社会を関連づけた思考」に関する分析結果を中心に行う。

3-3-2 記述型課題の結果

(1)と(2)のセット問題 教科(理科・社会科)を統合した深い理解に関する生徒の回答を水準分けした。水準の分け方は以下の通りである。

水準0:(1)の課題でAを選択した生徒のうち、(2)の回答が不十分。

水準1:水準1という水準はここでは使用しない。

水準2:(1)の課題でAを選択した生徒のうち(2)の課題で具体的な社会政策等を説明。

(1)の課題でBCを選択した生徒のうち(2)の課題で具体的な社会政策等を説明。

水準3:(1)の課題でBCを選択した生徒のうち(2)の課題で問題を克服するための社会的方策を具体絵的に説明。

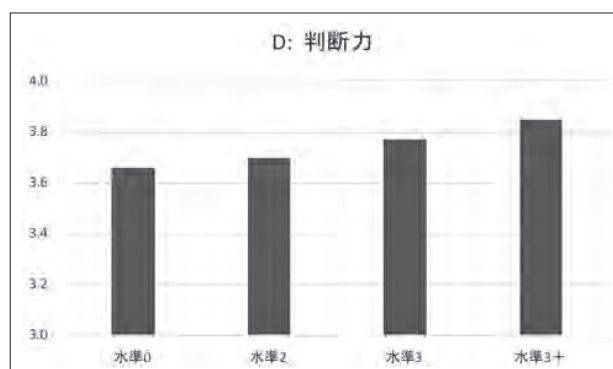
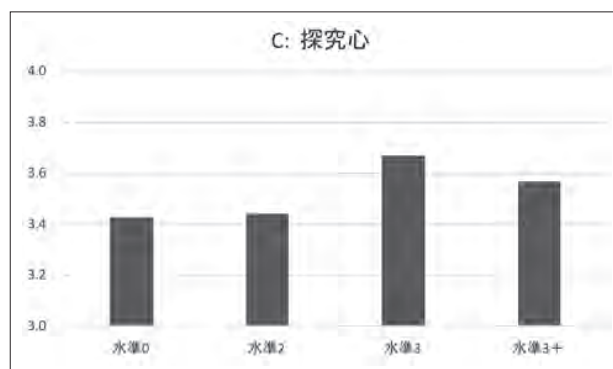
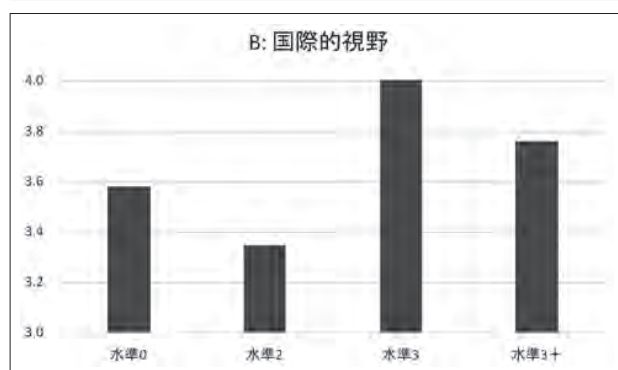
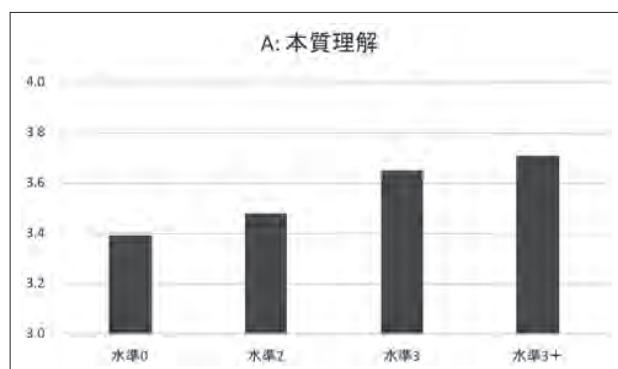
水準3+:水準3を満たす説明に加えて、さらに現代の社会的問題(南北格差や国内の経済格差、医療倫理、過重労働等)について説明。

以下は生徒の回答を評価水準に分けたものである。水準1は省略している。

水準	水準0	水準2	水準3	水準3+
人数(人)	76	12	18	12

3-3-3 生徒の思考力調査と意識調査アンケート結果とのクロス集計

生徒の思考力調査を測るための記述型課題の結果と意識調査アンケート結果とのクロス集計を実施し、その相関関係を分析した。横軸が思考力調査の水準、縦軸は生徒の意識調査の得点である。



Aの力(本質理解)とDの力(判断力)に関しては、思考力高い生徒ほど、生徒の意識が高いことが伺える。Bの力(国際的視野)とCの力(探究心)に関しても思考力高い生徒ほど、生徒の意識が比較的高い。この調査は高校1年生の4月に行った初期値であるため、今後経年変化を調査し分析を継続する計画である。

3-4 教員アンケートからの分析

専任教員に対して、H28年度のSGH研究開発に関わる意識調査を実施した。質問項目は大別して3つのカテゴリーに分かれる。

1. SGHに指定されたことで、生徒の興味、姿勢、能力に関わる変化
2. SGHでの活動が生徒に与える効果
3. 学校のグローバル化に関する先進的な取組

アンケートの結果の詳細資料に関しては、資料3に記載した。

3-4-1 SGHに指定されたことで、生徒の興味、姿勢、能力に関わる変化

どの項目に関しても、一定の割合で「わからない」と回答をした教員がいることがわかった。これは、個々の教員が行っている日々の教育実践の中では、実感として感じられないということの現れだと分析した。また、もともと生徒の「興味・姿勢・能力」は高かったと回答をした教員も一定数いる。本校では平成18年度からSSH研究開発を行っているため、その影響が大きいと言える。しかしながら、「向上した」「やや向上した」と回答をし

た教員の割合が大きかった質問も多い。中でも生徒の「海外へ行こうという気持ち」が向上したと感じる教員の割合は非常に多い。SGHを開始して、日々の生徒指導において教員が実感として感じることである。また、本校SGHで掲げる研究開発単位Ⅱに関わる事項において教員の評価が高いこともうかがえる。以下はその例である。

未知の事柄への興味

大変向上した (10.3%) やや向上した (28.2%)
身の回りで起こっている社会的課題への興味
大変向上した (7.7%) やや向上した (35.9%)
世界で起こっている地球的課題への興味
大変向上した (12.8%) やや向上した (41.0%)
日本の文化や言語に対する興味
大変向上した (12.8%) やや向上した (28.2%)
海外の文化や言語に対する興味
大変向上した (17.9%) やや向上した (43.6%)
海外へ行こうという気持ち
大変向上した (35.9%) やや向上した (25.6%)

研究開発単位Ⅱに関わる事項

自分の考え方を見つけようとする姿勢
大変向上した (12.8%) やや向上した (17.9%)
問題を立てる力
大変向上した (5.1%) やや向上した (30.8%)
問題を解決する力
大変向上した (7.7%) やや向上した (28.2%)
問題を探って明らかにしたい気持ち
大変向上した (7.7%) やや向上した (28.2%)
考える力
大変向上した (7.7%) やや向上した (33.3%)
成果を発表し伝える力
大変向上した (13.2%) やや向上した (23.7%)

3-4-2 SGHでの活動が生徒に与える効果

ほとんどの項目に関して、「大変向上した」、「やや向上した」と回答をした教員の割合が大きいがわかる。本校SGHで掲げる研究開発単位に関わる活動のどれに対しても教員自身が実感として効果があると感じることができるのはSGH研究開発での大きな成果である。以下はその例である。

研究開発単位Ⅰに関わる事項

課題研究Ⅰ (中学生)
大変効果があった (12.8%) やや効果があった (38.5%)
課題研究Ⅱ (高校生)
大変効果があった (12.8%) やや効果があった (38.5%)
大学や研究所へのフィールドワーク
大変効果があった (12.8%) やや効果があった (51.3%)

外部講師による特別講義

大変効果があった (12.8%) やや効果があった (61.5%)

研究開発単位Ⅲに関わる事項

本校が実施する企画への参加
(モンゴル、ノースカロライナ、Global Discussion等)
大変効果があった (28.2%) やや効果があった (48.7%)
海外の大学・研究機関等の訪問
大変効果があった (15.4%) やや効果があった (38.5%)
海外の生徒との協同課題研究
大変効果があった (12.8%) やや効果があった (46.2%)
英語で表現する力を高める学習
(ALE、G30 for everyone等)
大変効果があった (7.7%) やや効果があった (43.6%)
文化体験への参加
(着付け、礼法、能や狂言、モンゴル語講座等)
大変効果があった (15.4%) やや効果があった (61.5%)
校内で行う海外の生徒との交流
大変効果があった (30.8%) やや効果があった (51.3%)
海外からの長期短期留学生のホームステイ受け入れ
大変効果があった (2.6%) やや効果があった (25.6%)

3-4-3 学校のグローバル化に関する先進的な取組

ほとんどの項目に関して、「大変向上した」、「やや向上した」と回答をした教員の割合が大きいがわかる。本校SGH研究開発が、生徒の能力・資質だけでなく、新しいカリキュラム開発や、地域や社会との連携、教員間の連携を深める上でたいへん重要な役割を果たしていることが、教員アンケートの結果からも見てとることができる。以下はその例である。

新しいカリキュラムや教育方法を開発する上で役立つ
そう思う (30.8%) どちらかといえばそう思う (46.2%)
教員の指導力の向上に役立つ
そう思う (17.9%) どちらかといえばそう思う (46.2%)
教員間の協力関係の構築や、新しい取組の実施など、学校運営の改善・強化に役立つ
そう思う (7.7%) どちらかといえばそう思う (59.0%)
学校外の機関との連携関係を築き、連携による教育活動を進める上で有効だ
そう思う (23.1%) どちらかといえばそう思う (56.4%)
地域の人々に学校の教育方針や取組を理解してもらう上で、よい影響を与える
そう思う (7.7%) どちらかといえばそう思う (33.3%)
将来のグローバルリーダーの育成に役立つ
そう思う (20.5%) どちらかといえばそう思う (43.6%)
学習環境の整備に役立つ (パソコンの充実、図書の充実、Wi-fiの設置等)
そう思う (35.1%) どちらかといえばそう思う (48.6%)

学習環境の整備に役立つ（パソコンの充実、図書の充実、Wi-fiの設置等）

そう思う（35.1%）どちらかといえばそう思う（48.6%）SGHに指定されたことで、学校のグローバル化に関する先進的な取組が充実したと思いますか。

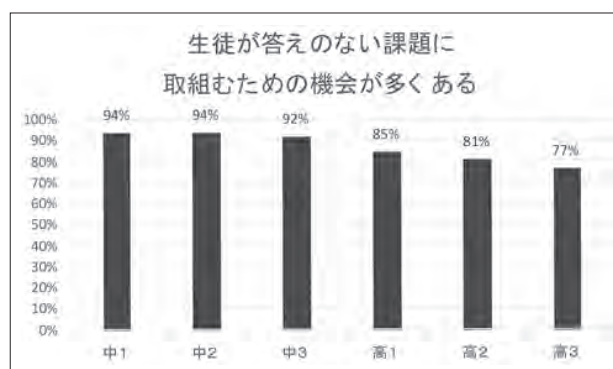
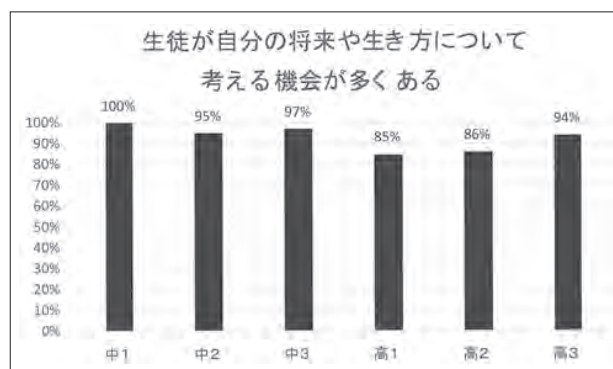
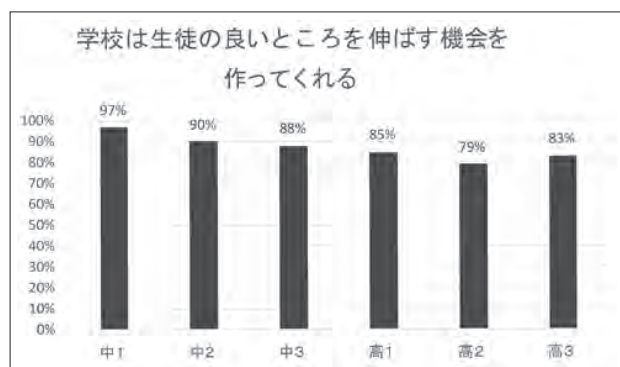
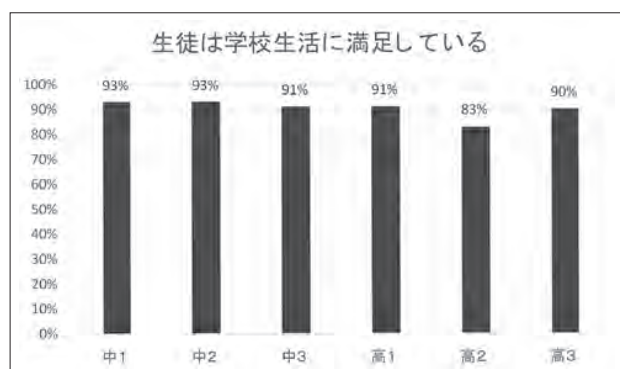
大変充実した（23.1%）やや充実した（48.7%）

3-5 保護者アンケートからの分析

H28年12月に、保護者にアンケート調査を実施した。具体的にSGHという名称をアンケート項目の中に入れず、以下の4項目を含め学校評価のための学校環境調査という名目で実施した。対象は全校生徒（中学・高校）の保護者であり、回答者は無記名で実施した。回答率はおおむね80%であった。実施方法は、質問紙、マーク方式のアンケート用紙、提出用の封筒（無記名）を配布し各クラスで担任が随時回収した。集計は管理職が行った。グラフは、「そう思う」以上の回答をした保護者の割合である。

- (1) 生徒は学校生活に全体として満足している。
- (2) 学校は、生徒の良いところを伸ばす機会を作っている。
- (3) 生徒が自分の将来や生き方について考える機会が多くある。
- (4) 生徒が答えのない課題に取組むための機会が多くある。

以下はその結果である。どの項目も高い評価を保護者から受けていることがわかる。



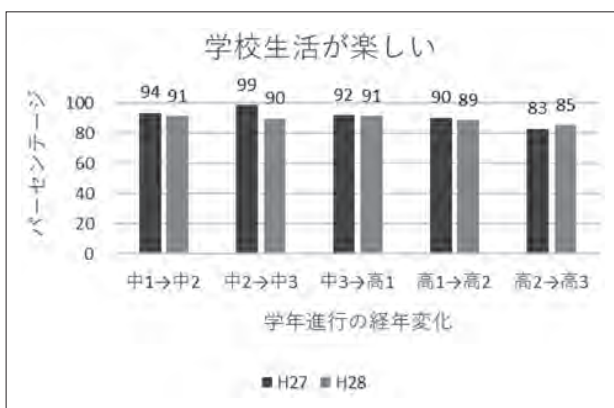
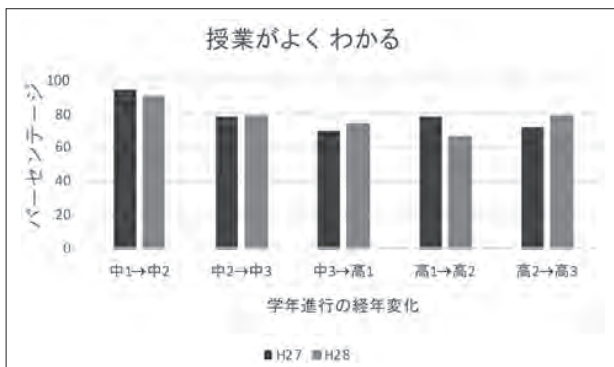
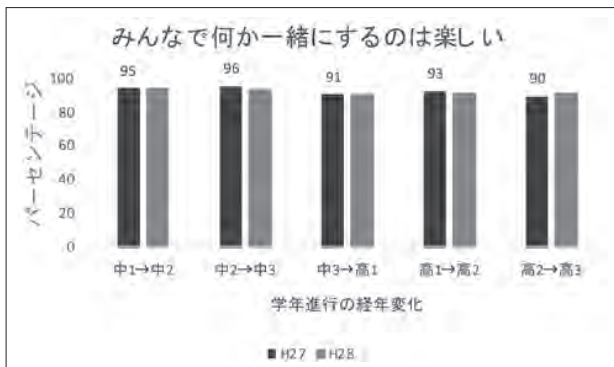
特に、受験を意識し暗記・記憶・再生型の学習に傾倒しがちな高校3年生の生徒をもつ保護者は、受験のための教育を高等学校や教員に求めがちなものであるが、「答えのない課題に取組むための機会が多くある」という学校の教育方針を否定的にとらえるのではなく、肯定的に捉えていることは保護者が本校の教育方針を支持しているからであると推察する。このことは、「生徒は学校生活に満足している」と回答した保護者が多いことと組み合わせればより明確にわかる。また、大学で学びたい内容よりも、偏差値による大学や学部選びになりがちな近年の生徒の受験傾向、生徒のキャリア指導と称しながら、どこの大学にどれだけの生徒を送り出したかがすべての進学指導になりがちな高等学校とは異なり、「生徒が自分の将来や生き方について考える機会が多くある」、「学校は生徒の良いところを伸ばす機会を作ってくれる」と回答をした保護者の数が中学1年生から高校3年生まで、さほど大きな減少をしていないことは本校が自信をもってアピールできる点である。

3-6 生徒の学校調査アンケートからの分析

H28年12月に、生徒にアンケート調査を実施した。保護者アンケート同様、具体的にSGHという名称をアンケート項目の中に入れず、学校評価のための学校環境調査という名目で実施した。対象は全校生徒（中学・高校）の生徒であり、回答者は無記名で実施した。回答率はおおむね100%であった。実施方法は、質問紙、マーク方式のアンケート用紙を配布し各クラスで担任が一斉に回収した。集計は管理職が教科だけではなく、「そう思う」

以上の回答をした生徒の割合である。

このアンケートは、本校で行っている協同的探究学習（研究開発単位Ⅱ）の成果を学習面ではなく、学校生活にどのような影響があるのかを調査した。H28年度は、理科・数学などの自然科学系教科だけでなく、文系教科や実技教科にも協同的探究学習を取り入れる試みを開始した。H28年度は、中学では社会、英語、国語、美術で試行した。協同的探究学習などの協同的な学び（アクティブラーニング）は、学校やクラスの雰囲気や生徒の学びへの姿勢と大きな関連がある。下記のグラフはH27年度とH28年度に実施したアンケート結果の経年変化である。



協同的探究学習の第一の目的は、「わかる学力」を育成することある。しかしながらグローバル化した社会においては、人々と協力して問題発見と問題解決にあたる必要がある。協同的探究学習「わかる学力」を育成するだけでなく、生徒アンケートからもわかるように、自己肯定感や、自己効力感も育成することにつながる。高校

3年生においては、H27年度（高2）からH28年度（高3）になるとどの項目も経年変化が上昇している。協同的探究学習を核に、このような好循環を維持することにより、持続的な成果へとつなげていくことができる。

3-7 卒業生調査実施の取組（試行中）

卒業生追跡調査を現在の試行中である。本校は同窓会組織がここ数年本格的に組織化され、年に数回ではあるが幹事会が校内で行われる。昨今、個人情報規制が厳しくなる一方で、同窓会幹事が中心となって組織する学年の絆は強くなっている傾向にある。これは、SNSの普及にともない比較的手軽に相互に連絡を取りやすい環境にあるためである。以下に添付したものは、現在試行中の卒業生調査アンケートの一部である。次年度は質問項目を吟味、改善し、実際に実施する方向で計画をしている。

卒業生アンケート（試行）

このアンケートは卒業生追跡調査の試行であり、個人を特定して調査するものではありません。アンケートの結果はすべて匿名で集計されます。このアンケートは、卒業生にのみ送付されるアンケートであり、回答率を向上させるために実施されています。ご回答のご協力をお願いします。

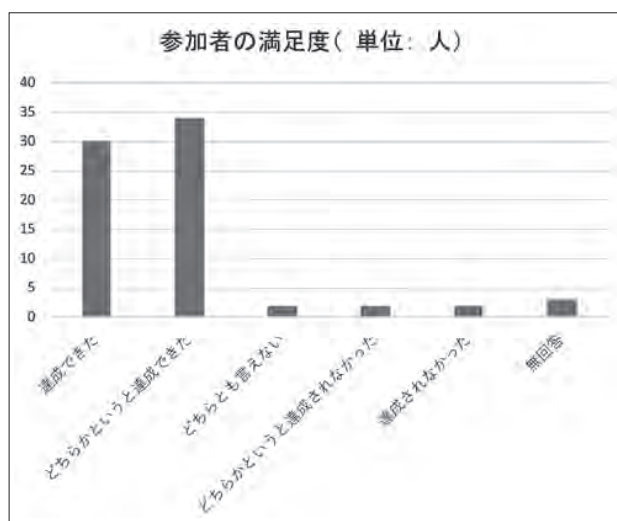
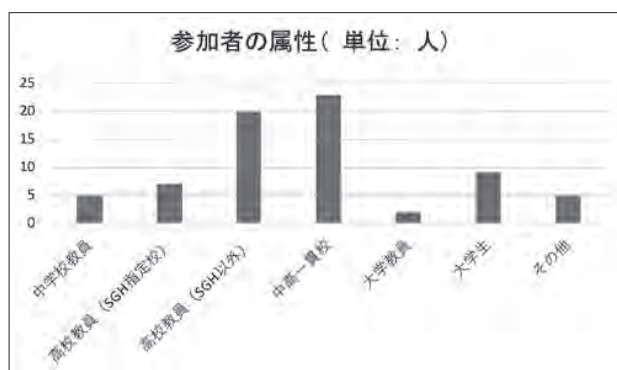
- あなたが卒業した年度はいつですか。
 - ☐ 平成25年度
 - ☐ 平成26年度
 - ☐ 平成27年度
 - ☐ 平成28年度
- あなたは、大学在学中に留学又は海外研修に行ったことはありますか。
 - ☐ はい
 - ☐ いいえ
- 問2で、はいと答えた方にお聞きします。留学または海外研修の期間を教えてください。
 - ☐ 1週間～2週間
 - ☐ 2週間～1か月
 - ☐ 1か月～半年
 - ☐ 半年～1年
 - ☐ 1年以上
- 高校での「総合人間科」で行った課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えましたか。
 - ☐ はい
 - ☐ いいえ

- 問4ではいと答えた方にお聞きします。それは何年生の時の総合人間科ですか。
 - ☐ 高校1年
 - ☐ 高校2年
 - ☐ 高校3年
- 総合人間科であなたが研究した内容が、大学での研究につながっていますか。または、つながった研究をしようと思っっていますか。
 - ☐ はい
 - ☐ いいえ
- 問6ではいと答えた方にお聞きします。それは何年生の時の総合人間科ですか。
 - ☐ 高校1年
 - ☐ 高校2年
 - ☐ 高校3年
- 大学在学中に大学や他機関から表彰を受けたことがありますか。
 - ☐ はい
 - ☐ いいえ
- 問8ではいと答えた方にお聞きします。具体的な表彰の名前を教えてください。

3-8 SGH研究成果発表会開催による第三者評価

H29年2月10日（金）にSGH第2年次研究成果発表会を開催した。多くのSGH校が生徒によるポスター発表をメインに開催している中、本校はあえて、研究開発単位Ⅰ（課題研究Ⅰ・Ⅱ）、研究開発単位Ⅱ（協同的探究学習）に関わる公開授業を中心に行った。海外研修や英語によるプレゼンテーションはあえて今回は行わなかった。そのためもあり、本校が行ったSGH第2年次研究成果発表会には九州から北海道まで多くの教育関係者の参加をいただいた。また、それ以上に地域の公立中学校や公立高等学校の参加も多く、本校のSGHを地域に還元することができるよい機会となった。参加者は本校教員をのぞき、総勢150名を超えた。参加者の多くは、中高一貫校の教員である。

その中からアンケートに答えてくれた71人分を分析した。



（第2年次研究成果発表会への参加目的の一部）

- ・新しい学びの研究（中高一貫校教員）
- ・今後の教育のあり方についての知見を広げるため（大学生）
- ・ALの具体例をよく見聞きするため（中学校教員）
- ・先進的な取組を参考にするため。（SGH高校教員）
- ・貴校の研究・実践内容をまなびたかったから（中高一

貫校教員）

- ・普段行われている授業の中でSGHがどのように組み込まれているか（高校教員）
- ・今後の自校の学校運営と授業実践に活かすため（中高一貫校教員）
- ・協同的探究学習を国語の授業でどのように展開できるか。モデルケースを見たかった。（中学校教員）
- ・本校もSGH2年目のため参考にさせていただきかったから（SGH高校教員）

（参加者の意見・感想）

- ・課題探究型の授業を行うには、少なくとも教科・学校全体の共通理解、そして可能であれば学校段階を超えた連携・学び合いが必要だと思いました。（大学生）
- ・このようなスタイルの授業のみで大学入試に必要な英語の学力が身につくとお考えですか？皮肉ではなく素朴な質問です。私の勤務校では、和訳や英作文の指導に追まわられているので（高校教員）
- ・生物教室で参観させていただきました。発表内容はアカデミックな興味深いものでした。サイエンスの知識的な部分もよく学習されているのと感じました。（SGH高校教員）
- ・生徒の成果についてよく理解できた。それまでの取り組み、指導のたまものだと思いますが、その過程がわかるような資料があると、本校での指導にも役立てやすいと思いました。（SGH高校教員）
- ・積極的に参加する生徒の姿に感銘を受けた。質問力も高く、発表も工夫があった。先生方のご指導も参考になった。（中高一貫校教員）
- ・6班に分けてのローテーションの方法と各教室を使つての1人1人の発表システムが素晴らしかった。ぜひ本校でも参考したいと思った。（中高一貫校教員）
- ・アクティブラーニングの様々な方法が実践されていて、たいへん興味深かったです。6年プログラムが組み込まれていることをポスターセッションで実感しました。（大学生）